

浄土

1981-5

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 逓輸省 (特別投承認雑誌) 第三二五号
昭和五十六年四月二十五日印刷 昭和五十六年五月一日発行
第四十七卷 第五号



浄土

浄土堂



新茶を飲む

八十八夜を迎える頃になると、まさに新茶の季節である。私自身は、まあ、それほど日本茶をつねづね愛飲しているわけではないが、それでも新茶の芳しい香りを、老母に勧められてみると、一口や二口、すすってみてもよいという感じである。一刻、母と共に茶を喫する、これもまた良いことであると思う。今日は、萌える新緑の初夏の熱気に毒されたか、母は茶卓など用意しておもむろに茶を入れた。その馥郁たる香りを、さて一口――。



ところが、小さ目の湯飲み茶碗に注いだはずのお茶の大半が、茶卓の方にこぼれてしまつて、これはまた茶碗を手にするこゝとさえできない。年老いた母の手元と目の不自由さからか、新茶の給湯も、まずは失敗であつた。それでも私は、茶卓の方のこぼれ湯も我が口に注ぎ、その後で茶碗の新茶を厳そかに飲んでおいた。まあ、結構なお茶であつた。

というのも、実は月刊誌『音楽の友』五月号の、火野鉄平氏の“ART RANDAM”というコーナーで、装飾芸術の研究者小野二郎氏の新著『紅茶を受皿で――イギリス民衆芸術覚書』（晶文社刊）という本が紹介され、十八世紀のイギリスやフランスでは、紅茶やコーヒーを受皿で飲む風があつたことが取り上げられている。版画家ルイ・マラン・ボネの“コーヒーを飲む女”という版画絵が挿画されているが、まさしくカップのコーヒーを受皿に注いでいるという図柄で、「いままさに飲まんとする豊満な美女の絵」であるという。

かくして五月の一日、私もこれをまねた次第。

（原 裕）

五月号



だとい余の行なしといえども、
菩提心をもって往生の業となす
なり。

——『選択本願念仏集』
(定本法然上人全集 1 P.162)

目次

法話

老いたくなし……………遠田弘俊……(2)

続育ちゆく若い人たちへ……………徳久鐵郎……(6)

母なる大地……………平野仁司……(12)

随想・出会い……………古宇田亮順 ……(17)

詩・・・善き友に捧ぐる歌……………佐竹隆……(15)

特別寄稿

仏教徒としての生き方・その生活指針 ……新保義道……(22)

自由の反省……………松崎可定……(32)
—和と求心力—

浄土句集……………一田牛畝選……(30)

〈表紙のことば〉海芋……………土屋正男……(28)

〈表紙裏・巻頭言〉新茶を飲む……………原裕

念仏ひじり三国志④——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

法 話



老いたくなし

遠とう田だ弘こう俊しゅん

(東京・小石川慈眼院住職)

小野小町の歌として伝えられている一首に、「おもかげの変らで年の積れかし たとい命に限りありとも」とありますが、私達がこの世に生を亨けて活きる上で、どうしても免れることの出来ないものは、老、病、死ということでありましょう。お釈迦さまは四苦といって、「生」を第一に挙げて、生れて来たことは苦の第一としています。それならば生れなければよかったのだ、とも言えません。ここにこうしてある私は誰がどうしたというものではなくて、どうしても生れなければならなかった業ごうとでも申しましょうか、深い因縁に依って来たもの

であることに気づくのです。夫婦があれば必ず生れるかといえは必ずしも生れるとは断言出来ません。世の中が非常に進歩して、自由自在に子供を産むことが出来るようになり、一度に五人の子供が生れたといった驚くべきこともあり、さればとて一人も子供が生れないと歎いている人達もいるわけです。まことに思うようになります。人は人の世の常ではないでしょうか。そこでもう一度小町の歌を味わってみたいと思います。小町といえは昔から美人の代表として、何々小町として、必ずその土地では評判の娘さんと定まっているのです。その人が自分の美

貌に対する愛着から何とかして醜い姿になりたくない。年老いても今のままでありたい。たとい限りある命として、いつかは死ぬであろう、美しさを保ってゆきたいと訴えている切々たる女心が哀れなまでに歌い上げていると思います。たとい命に限りがあっても、この容姿だけは変りたくないとする心、私は歌の説明に疎いものですが、人間の心は、常に何かの願いというものを持ちつつけていることだけは否定出来ません。特に小町の歌ということで何か美貌を連想するのですが、必ずしもお互いに自分の容姿に自信があるとは限りません。体格といい、容貌といい、一向に冴えなくて、まあよくもこれで平気で人様の前に出て恥しくないものだ、時には卑下することもあるものですが、それでも自分ではこれだけはというものがあって、そのことに期待しているものだということです、私達はこの世に生を享けたということに対しては絶対に肯定しなければなりません。その上に立って、老、病、死の苦をいかに脱するか、私は今静かに人生のたそがれに立って想いを廻らしているのです。

「目に青葉山ほととぎす初かつを」

この句はいみじくも天地自然の恩恵を十七文字に詠んで

いると思います。こうした生き生きとした自然の中にどれ程の寿命を保つことが出来るものなのか。誰でも思うことは、一つであろうかと思えます。豪雪の今年の冬との闘いに耐えて、漸く春を迎え、新緑の季節ともなると、総べてが蘇がえって、何処にあの恐ろしい冬があったかと思うのが自然の姿でありましょう。有為転変は世の相だと聴かされても、成る程その通りですと、一応の了解はしてみるものの、何か心の奥に、これでもか、これでもかといった慾求が起ることはどうすることも出来ません。これが遠い昔から人間の「願」として、私達の祖先が持ち続けてきたものでありましょう。

人間が他の動物と異なる大きな要素は、心というものの働きが抜群であるということだと思います。勿論他の動物にも心の働きがあることは否めないことです。然し人間という動物は特に自我というものに強く自らの生存に對して飽くまでも他を犠牲にして憚らず、而もその犠牲の上に立って今日の隆盛を見ていることも事実でありましょう。適者生存、弱肉強食という語は、自然本能の上に立った人間エゴの言葉だと思います。往々にして人間とは他の動物に見られない心の働きがあると信じもし、

語っても来ていますが果してそうであるか否か。動物的という言葉は本能的という言葉で連想されるように、行動の総べてが単に衝動的ということに終るようですが、若し私達でも、総べてが衝動的といえればそれは本能的ということになるでしょう。「願」の一字は動物的、本能的な心と非常に大きな隔りがあり、この一字こそ人間が人間としての本性に活きる根本ではなからうかと思えます。その「願」の内容が人生にとって最も大きな影響を与え、今も多くの人々の心に深い感動を与え、この苦の世界に生きる望みを失わしめないものは何か――。

多くの仏達の「願」はその成就されたところに救済が約束されているのです。それこそが単に本能的な慾求に依る望みの達成ではなくて、人間は人間として到達しなければならぬ階級でなければと思います。世に菩薩としてお働き下さる方々には現に仏への道を歩みつつ、私達に喚びかけて下さっている存在を忘れてはならないでしょう。既に遠い昔その救済の「願」を発して現在猶私に働きかけて下さっている仏こそ「アミダ」様であると頂くのです。私は今大きな人生の竿頭に立って法蔵菩薩が永い間の自己反省から、人間の心の奥の奥に懐いている

慾求に応えるべく、世自在王仏と申す仏の前に「願」を発し、誓いを建てられたことに深く想いを回らすのであります。一々の「願」を静かに熟読すると、総べてが私独りへの喚びかけであることに気づくのです。ここで再び小町さんの心に入ってみたいと思います。小町は生死の中に立って、生れてきたものは必ず死ぬであろうことは悟っていたのです。命は必ず限りあるものだと肯定しています。然し小町は自らの美貌が衰えることは耐えられない、何とか今のままの姿で年の積るということにならぬものか、と願いを込めているのです。そのことを法蔵菩薩が仰言っています。若し願うならば必ず金剛の身を得させるであろう、と。力あるものは力の衰えを憂い、美貌なるものは容姿のうつろいを歎くは、私達の心の弱さだと思ふのです。私は毎年のように境内に集って来る小動物を観察していますが、特に猫属の一味には心を引かれます。ある人曰く「動物の方が遙かに人間より正直ですよ」と。尤もな言葉です。あれ程騒いでいた時節でも、過ぎてしまえば静寂そのものです。時には老猫が日陽の縁に眠り、いつかその姿も消えてしまふ。そしてやがて若猫が代って出て来る。ここに動物と人間との

違いがあるのだと開き直ってみても、人間の惨めさは、あくまでも自らの老いをかこち、衰えを憂えることに人間の人間たる所以であるといえるでしょうか。

偕而私は毎日の勤行に亡き人の回向をし、やがて来るであろう身の終りを想う時、今日の言葉（タイトル）として「老いたくなし」の一語は何を求めているのでしょうか。

「アミダ」さまは不老、不死であり、無量寿であり、無量光であります。寝ても醒めてもそのことを聞かされもし、そう信じて七十余年を過してきたのです。今日も家族と共に食事し乍ら「おやじさんも達者だ、元気だと言っていないで一度人間ドックに入ったらどうだね」と、「御親切は有難いネ、然し今のところ何がどうだということでもないから、そう急ぐことはないだろう」と。こうした会話の中にも迫り来る人生の黄昏を泌み泌みと思いうわけです。心では「アミダ」様の大きな慈悲を信じ、或いは何時お迎えがあるかも知れないと思っけていても、それが即死への連想となる時「総べて有難う御座いました」と合掌の中に受け容れられるかどうか。そうありたいと願わずにはいられない。先日ある人と語った時、曰く「五十六十花なら薔、七十八十働き盛り、九十になっ

て迎えがきたら百まで待てと追い返えせ」。なる程ネ。と暫時絶句して呵々大笑したものです。果してこの通りに参らず、孤老の嘆きをかこつ人も世に数多あることを深く考えさせられることであります。

私は念仏の歎びとは「アミダ」さまと常に一緒なんだ、私は独りではないのだ、いつでも何処でもアミダ様の懷ろの中に生きているのだということの徹底にあると思うのです生れて来たものは必ず死を迎えなければならぬ。その死に到るまでの老・病はこれまた逃れることの出来ない路の景色ではないでしょうか。私の近所に一人の老婆が三十五年間の永い年月寝た切りの難病に犯されて、今も骸骨のようになって生き延びている方があります。一人娘の聳養子の孝養に依って平和な毎日を送っています。何時お訪ねしても不平を言わず愚痴らず、教えられることが多いのです。ありのままに頂く姿、宗祖大師の御詠に「生けらば念仏の功積り、死なば浄土に参りなん、とてもかくてもこの身にはおもし患うことぞなし」と仰せられています、老いなば老いの中に、老いを生かす、総べてが思召しと頂きたいものと想うこの頃であります。



続 育ちゆく

若い人たちへ

徳久 鐵郎

(芝中・高等学校長)

(社会人となって)

人間関係をどう捌さばいて行くか。社会人になって必要な心得はこのことにつきると思います。家庭で、学校で、親子の間で、師弟の間で、友達の間では許されていたことが、どうしても許して貰えないことが、次々と起ります。人間の心と心とは、同じ仏様の子である筈なのに、どうして、こう判って貰えないのだろうか。心の相互関係の難しさを、成人して痛感されることになるかと思えます。

(自分さえしっかりして)

こちらさえ確乎としていればいいのだ、という解決のしかたを教えられたこともありましたでしょう。嫁と姑の間のいざこざということは、よく聴きます。この争いは、いつになってもたえないことだということなのです。



人の心には、嫉妬心とか、邪推とか、意地悪な根性がちよつとぐらいはあるもので、その意地悪の心が両方に少しづつあれば、どうもしっくり行かないでしょう。こちらさえ、しっかりしていれば、うまく行かないことはあり得ないなど、うそぶいてはいられません。

（見性成仏）

仏教の言葉に見性という、大切な、入門者のための用語があります。魅力のある言葉であつて、若い人が仏教の話をきいてみようという気持ちになる心よいひびきをもっています。

見性というのは自己の本来の姿を見究めるといふ意味に用いているのですが、仏教上の入門という趣旨からみて、自己の本来の姿を見ることによつて、同時に天地宇宙と一体である自己、いわゆる大我を自覚することを求めています。この同時性が見得けんとくされないと師家しけは許してくれません。

見性（けんしょう）が即ち成仏（じょうぶつ）といわれるわけは、そのためであります。いまふうの用語で社会連帯の網の一目である自分を自覚するとか、世界内存在としての実存を認識することをさしています。

しかし、仏教は理論と実修と累ねてその上に日常化しないというと判つたとは言ひ得ません。見性の端的は、念仏行者ならたいてい判っています。また、座禅を一週間も続けてやると天地宇宙と一体の自分ということが判ってきます。このことが判った当座は、人が変つたようにしっかります。しかし、そういう自己認定だけではしかたがないのです。日常の行動の中で、その理論が生きていなければなりません。そのため、行を積むわけぎようであります。修行しゆぎようというのは、実際の行動の上に繰返し行なうことをさします。人に教えて貰つて修行することから



はいりますが、自分で、不断に繰返すことで修行になるものです。

(修行)

修行が積み重ねられると、日常の考えも、日常の実行も、理論通りになって、その手本を意識しなくなるだろうと思います。そういう日常性に徹してしまうということは大へん難かしいと思いますが、子供のような心で、良いことは良い、とそれだけの理由で割り切って行く日常が生れると、それでよろしいということになります。

(社会)

社会学という新しい学問が生れて、社会学が、むかしからあったいろいろの学問のすべてを総合するのであるという考えが生まれました。フランスのコントという人が唱道したのであります。日本ではいち早く明治時代に社会学を紹介して、高田保馬博士は、社会学の本質になるところを人間の心の中にある社会意識をとり上げて分析しました。今では、社会というと人間の集まっている関係という意味に抽象しますので宇宙全体と一緒に考えるわけには行きません。

(縁起)

しかし、社会という人間の心と心との関係で作り出されている網の目は、仏教でいう、横の関係、因果関係の一面を現代風に説明していると言えます。縁えんぎあって生じた縁起えんぎという趣旨を適確に説明しようと努めていると言えます。しかし、それだけでは説明が十分とはいいい切れません。



縁起という言葉は、他との関係が縁になって生じたということです。他との関係が直接の原因であるとは必ずしも言っていません。縁起をかつぐという迷信風の説明の仕方も含んでいますので、おかしな非論理的なことがその中にはいつています。直接、間接の原因になっているといふのです。関係の有無のはっきりしない原因も原因の中に算えてしまいますので、性起しょうぎと呼んでいます。

(性 起)

社会関係は理論通りの影響のしかたで、縁よって起っているわけではありません。誤解によって起ったり、錯覚によって起ったりもします。そうしたことを凡てを含めた縁起を性起しょうぎといっているのです。

相手方のもっている心理状態、こちら側のもっている心理状態、そのふれ合いで、いろいろなニュアンスのちがった社会関係が生れてきます。そういうわけですから、数学のように理論的には行かないのであります。そこで心的摩擦が生れます。

(態度決定)

実践的なことがさきで理論は後という気がしてなりません。人間は、相手の姿、相手の像を虚像として自分の意識にとらえ、それを自分の心で実際のものとして取扱っているように思えます。意識は局外中立の正しい鏡にはなり得ないように思われます。自分だけが態度をきめても限界があるのであります。



自分の生きている世界というものは、狭い局限された世界ですから、どうしても他を容れるわけに行かない所があります。道德生活の上で、価値観がちがう為に、他人と話がもつれるわけで、人のもっている価値風情にはこちらは鈍いという通弊があるのです。貧困は精神生活の貧困さから来ると言ってもよいかも知れません。

(現実)

現実の世の中は実に、豊かで、複雑で、多岐で、思い掛けないこととで充ちています。

こちらは、つねに、人間性に密着してまじめかも知れませんが、未知の世界が多く、実践が不足です。空しい通過につねにくやんでいるのです。

詩人のように多感で、プラトンのように理想高く、豊富な生活体験で過したいものですが、いつも浪費が多い割にわたしどもは充実感がありません。今日の生活は安息がなく、静観の時がなく、目標と静慮を欠いています。何が情熱を与えてくれるものでしょうか。じっと洞穴の奥から見つめているような賢者、洞見する人になりたいものだと思います。そうすれば、世を味う、豊富な人生への哲学的態度、新しい近代人の品性が生れると思うのです。

事柄に対する新しい愛、偉大なものへの献身、新しい人間への畏敬が生れる。

新しい仏教の情熱とも一致するのではないかと存じます。

(仏)

仏陀を「無限にして完全なる精神人格」と規定します。この提題は人格と世界とを規定します。この提題は人格と世界との関係から生れる規定です。ある一つの世界は一人格の世界で、



その人格の具体的世界であります。カソフツケセカイ「世界」という存在は、永久に不可解な対象であって、人格は「世界」には属さず、対立したものであります。こちら側から言えば、世界の中に存在し、関係している人格というものはあります。諸人格の一つの世界というものがあって、その中に存立している人格がすべてです。個人格の世界があるというよりほかはありません。だから、「世界」という唯一絶対のものはありません。物理的な「世界」とか、「大宇宙」を想定するわけにはゆかないのです。ただ、人格的なものの所属する「無限にして完全なる精神人格」の理念を想定するだけです。即ち仏陀です。

一人一人の人格の持つ具体的精神の理念を同時に定立させなければこの「無限にして完全なる精神人格」は成立しないのです。

(人間)

前の「完全無限の精神人格」は、形而上学的な人格主義につながるおそれがあります。個々人格は不完全、無限人格に関連するとは論理的に言えないからです。しかし諸人格が全体として集まって努力する所に、高次の人格主義的世界像を目標にすることはできるでしょう。

それを人間の世界の努力というものの集大成しようとしている悲願——理想だと考えられませんか。

各人格が理解と愛をもって連帯して、築いてゆこう。そうすれば個々人格の有限・不完全の制限の枠を超脱するようなある物に、たとえ前途遼遠であっても近づくことができるだろう。いのるということ、念ずるということ、そこに向って静慮し願望するということ、を続けたいものと思います。

母なる大地



「優勝おめでとうございます。ところで風邪気味だったようですが。」「いいえ、大変元気です。」「では、あの競技中の口元のハンカチはなぜですか。」「力走中は特に唾液がたまるのでここに受けとめているのです。私たちの大切な生命を育んで下さる大地に、どうしてツバを吐くことができましょるか。』」

昨年十一月十六日、世界中の注目を集めて堂々と二連覇を飾った「マラソンの女王」ミス夫人が、一昨年の秋第一回国際女子マラソン選手権大会で優勝した時の記者会見に臨んでの感動的応酬である。このことは、「道

平野 仁司

(大本山光明寺教務部長
座間市宗仲寺住職)

路にツバを吐かないようにと、ハンカチを片手に走り『さすが英国レディー』と観衆を感心させたエピソードの持ち主』と、朝日新聞(青鉛筆欄)にも現代の美談として取りあげられ、記憶に新しい。

人生には、ふとした折からその人の信条や生き方を変える大きな転機がある。その要因には、他者の何気ない言動、近辺の人に生じた不慮の災難、あるいは、自然の節度とも言える季節の移り変わりなど、それぞれ千差万別の様相があるが、測り知れない派生的な結果を創り出す。

事実、私もスミス夫人の心なごむ土への思いやりに感動し、その時から大地に対する認識を新たにした。身近かなところに感動の源泉があり、更にこのような情景に感じ入ることのできた幸せにも感謝している。

スミス夫人の含蓄ある言動こそ、強力な精神力を必要とするスポーツを支える秘訣かも知れない。土に寄せる慈しみの心と二度にわたる優勝は無縁ではないはずである。

人間にとってありがたいことに、感動は確かに反省の機会を与えてくれる。その連鎖反応は微細なものにも関心を深めずにはおかない。高度な文明社会に生き、無数の恩恵に支えられて生きる私共は、母なる大地に根ざした毎日があることを忘れがちでないだろうか。足元を見ると、必ず大地に直結している。どんな高層建築の上でも、その立脚点は大地との関連において成立している。恩恵の洪水に浸って、本質の存在から遊離したものの見方が現代の風潮の主流だと思い違いをし

がちな傾向を反省したいものである。

日本でも、古くから土に親しんだ風雅の記録、万葉集や古今和歌集など、現在それらを再読しても懐しい土壌の芳香が漂う。一方、昭和の世でも、昭和三十七年の「宮中歌会始」に「土」という御題でその心が詠まれている。ボイジャーの活躍するような現代でさえも、時代や人種を超えた自然に寄せる共通の心をスミス夫人の輝きの中から見つけた。

英国の地理的条件は、日本と比較すると、はるか北部の緯度に位置していて、湖水地方に生きた十八世紀ロマン派の詩人、ワーズワースも自然を背景とした詩が多い。その不朽の名作も伝統的に受継がれた要素は十七世紀の形而上詩人によるところが大きいと言われている。自然の常理を方向づけ、心情の豊かな人間を育てることは大いに心すべきことであらう。英国の形而上詩人たちの隠喩は確かに宗教にかかわる讃美には違いないが、その根底には土の生命が強く働きかけていること

は興味深い。快適な風土、逆に厳しい風土の中でも、人それぞれに迎合した生き方をその中から見出す人間の知恵をありがたく思う。

土に寄せる私の思いは、高雅な香をたたえて地中の埋れ木として知られている「沈香」へとめぐる。地中であって、あらゆる要素を吸収し、長い年月の間、地層の変動に耐えた結果、あの妙なる芳しさを地上にもたらす。

宗仲寺においても土と伝統についての関連は大きい。慶長八年時の領主、内藤清成の建立による当山は徳川家康公の日光御遷座の道として「東照公ゆかりの地」となっている事実である。近隣一帯は新しい時代の波により、目ざましい変革がありながら、旧態依然とした土壌や樹木に護られている宗仲寺の境内には、家康公の訪れがあったとする記録を裏づける雰囲気はまだ失ってはいない。毎日、幾度となく行き交うこの土は、家康公より拝領の茶器類と共に伝統に生かされて行くことであらう。

土の縁と当山とのかかわり合いは尽きない。先般（昨秋十一月二十二日）、前述の当山開基の内藤清成から十七代目に当られる内藤頼博氏（元名古屋高等裁判所長官）、作家水上勉氏等をお招きして文化特別講演会を開催した折、水上勉氏は人間と風土のテーマで話され自然に直結した人間性の美しさが迫力となり来会の人々の心を打った。

水上氏には、以前ご親筆の「落花帰根」なる色紙をいただいたことがある。地上に花開き、その使命を終えた命の地に還る静けさ、美しさが伝わって来る。別の見方をすれば、次に生れ出る新しい生命の誕生というダイナミックな生命の連続性を思わせる。ここにも土壌の媒体がある。

このようなありがたい数々のご縁で結ばれているわが身の現在に眼を向ける時、年頭のご挨拶にと、檀信徒各位のお宅へわらじを踏みしめて生きた土の感触を味わった喜びは、確かなものであったと思えてくる。

詩

詩

詩

善き友に捧ぐる歌

佐^さ

竹^{たけ}

隆^{たかし}

みほとけの みちびきのおかげで
わたくしはあなたに
そして、あなたはわたくしに
出会いました。

人生における^{ベネフィット}出会いとは
なんと不思議な

そしてまた、なんと有難い
涙の出るほど うれしいことでしょうか。

あなたにめぐり合うことができただけでも
今日まで生きてきた

甲斐があったと言わねばなりません。

今はただ 感謝の気持で胸がいっぱいです。

あなたとの出会いが

遅すぎたと歎いてはいけない。

何故なら、あなたとの出会いによって

わたくしは人生の黄昏たそがれに、美しい夕焼けを見ることができました。

お互いにうんと長生きをして

喜びのもてる仕事にはげみましょう。

そして、新しいわたくしたちの旅立ちを祝いましょう。

人生は、常に今日から始まるのです。

もう一度 杯を挙げて

二人の夜明けを祝いましょう。

「愛と友情の絆」のために、「新しい明日」のために、
そして、「永遠の今」のために。

反 歌

みほとけの みちびきとやいわむ よきと
もと めぐりあいたるは なみだぐましも

*仏教徒とは善き友の集りである。

随想・出会い



こうだ りょう じゅん
古字田 亮 順

(東京・千歳西光寺住職)

近頃、中国から肉親を探しに多勢の元日本人孤児が初めて来日し、その半数以上の人が肉親を探しあて涙の対面をしたというニュースは私達の心をとらえ、改めて戦争の悲劇を伝えるものであった。経済大国、経済成長と騒がれ、しばし平和な世界に安住している今日の日本にとっても戦災の悲しみを忘れてはならない。それだけに今回の中国残留孤児の肉親探しに最も熱心であった代表者(長野県のご住職)の「一人残らず肉親と再会できるまで戦争は終わっていない」とおっしゃる言葉が強く心に残った。

自坊が墨田区にある関係から毎年三月十日になると本所の東京都慰霊堂の戦災法要にご奉仕させていただくが、戦没者の塔婆供養をしていると、家族のうち助かったのは一人だけという記録が余りにも多いことに驚きを感じる。昭和二十年三月十日の東京空襲で家を焼かれ、自分も夢中になって火の粉の中を逃げ廻り、無事に母と防空壕で再会できた体験をもつ一人として、家族と別れ、たった一人残された人達の苦しみは如何ばかりかと、慰霊堂に参列する度に思うものである。その日から今年はやや三十七回忌を迎えた。その間、私達は銃をも



—カオイダン・難民キャンプにて—

たされることもなく、まして戦禍に出会うことなく過すことができ、本当に有難いことであった。

それに引きかえ、日本から余り遠くない国々で、きびしい状況が伝えられた。イラン・イラクの衝突、アフガニスタンへの外国軍隊の侵略、緊張のポーランド状況、そしてカンボジア難民の事などである。

国外には一度も出かけたことのない自分にとって、そういういった他国の惨状に手を出すなど考えられなかった筈なのに、同じ仏教徒同士の惨状を見逃してはならないとする全日本仏教青年会の熱意にうながされ、昨年八月の第五次救援隊に同行することとなった。

「義援金や物資を届けたり、仏堂で礼拝読経する他に、もっと交流を深めたい」とする仏青救援隊の言葉により、しばらく親しんできたパネルシアター（絵話し・歌遊び）を持参することにした。この参加者は、医師、僧侶、高校教諭など十八名にのぼった。

食べる物がなく遂にはやもりや野ねずみ、むかでやみみずまで見つけ次第口にはうり込み、かろうじて命をつないでいたという難民キャンプの人達のことは新聞などからある程度報しるされていたが、キャンプ内の粗末な家に

も驚ろいた。ニッパヤシの葉でつくられたという家も六月の長雨で殆んどつぶれ、近くにトタン屋根の新しい家が建築されているところであった。こんな暑い国にトタン屋根で果して健康でいられるのだろうか、とにかく難民とはいえ、タイ政府としても招かざる客ゆえに、どの程度援助すべきかは難かしいところである。その上、この難民キャンプのあるタイ・カンボジアの国境は一月前にもベトナム兵とタイ軍隊により激しい撃ち合いがあり双方にかなりの死者が出たと伝えられる程で、余り安全な状態ではなかった。

「こんな時期に来ていただいたのには感謝するが、現在の国境は大変危険な状態であるため安全の保障はありません。ただタイ政府としても兵士を数名護衛につけ、最悪の危険が起きないように充分配慮する」——などと、到着早々、世界仏教徒連盟の本部で内心おだやかならざる言葉を聞かされた。正直なところ、家族を残して衝動的なまでに日本を離れてしまったことにはいささか後悔せざるを得なかった。しかし同行の仏青諸氏の情熱はこの言葉に少しも動ずることなく、かえって同じ仕事をするのに団結心を強められたように思えた。

タイ領内にあるカンボジア難民キャンプ（サケオ・カオイダン）をはじめ、バンコク郊外のスラム街、国境の開拓村、医療センター、養護施設など世界仏教徒連盟本部の予定してくれた会場は短期間にしてはぎっしりと詰っていた。

ここ四、五年でカンボジアの人は百万人いやそれ以上殺されたといわれるが、正確な事実はつかめない。東洋の極楽といわれたカンボジアの首都プノンペンの人口はその頃二万数千人といわれ、最盛時の五十万以上の人は一体どこにいったのだろうかといわれていた。必死の思いで避難してきても、国境近くで更に殺されたり乱暴されたりした一般市民の数も相当多いと聞かれ、とにかく戦争が起きると弱い立場のものは迫害されるばかりであるといえられた。

粗末なキャンプ内の仏堂でカンボジア僧と共にバール語の経典を誦し、救援物資を届け、それから同行医師の診療中に、集まってくれた人達に、持参したパネルシアターを実演した。最初は言葉の不自由な私の実演がどの程度理解されるだろうかと不安もあったが、始めてみるとそんな心配はすぐに消えた。みんな日本人に良く似

た顔で、その一人一人が行儀よく合掌して迎えてくれ、進行する程に歓声が高まり、共に歌い、共に手を叩き笑ってくれた。粗末な会場、不自由な環境なればこそかえって心を同じくしてくれるのだろうか。その喜びの目を見た時、ああやっぱり来て良かった。パネルなるものを続けていて良かったと不思議な因縁に感謝せずにはおられなかった。言葉こそ良く判らなくても、絵や歌はそのまま相手に受けとめて貰える。下手なゼスチュアも少しはそれを補ってくれる。しみじみと世界の狭さを感じ、せめて仏教徒相互の交流に少しでも参加できて良かった。全日仏青という名のもとに宗の異なる仏青諸氏と枕をならべ、深夜まで語り合えたことも大きな収穫である。

他にも警備もののしく、我々の持参品すら改めて点検される険悪な雰囲気の中、国境の開拓村でも数カ所歩いて同じように活動した。やはりここでも恵まれない環境なればこそ、思わぬ出会いを喜んでくれた。貧しきが故に身売りされる少年少女、そして一カ月百円程度の賃金で酷使され、単純労働の疲れから遂には歩けなくなったという子供達の話は、とても日本にいますと考えられな

い。それは五十年、百年も昔のことのように思われる。同行した妙心寺派のグループはこの土地に寄金を募って一カ寺建立するまでに発展することになった。そしてそのお寺で教育や保育の援助を約束するまでになった。

難民キャンプの近くに事務所を構えた曹洞宗の青年僧のグループは絶えず日本からのボランティアを置いて奉仕活動に専念していた。夜遅くその青年僧の方々と、奉仕とは、難民とは一体自分達にとって何であるのか、日本でなすべき仏教徒の役割りは何か、等忌憚きたんなく語り合えたことも楽しかった。

いくら現地の子供達が大声で喜んでくれたとはいえ、たった一度の出会いだけである。何度も足を運べることが許されない自分にとって、これは単なる自己満足でしかありえない。そしてこんな機会を得られたのも仏青諸氏の熱意とタイ仏教会の協力があつたればこそで、こうした恵まれた立場におかれることは贅沢ぜいたくな事である。地味な処で根気よく続けているボランティアにとって迷惑にならなかったかと考えるのである。そしてまだ接する機会のなかった難民が余りにも多いことに悲しみをおぼえる。

世界の情勢は決して甘くない。「平和」と口にいうことはたやすくも、案外簡単にもろくくずれやすいものである。一人一人が真剣に、大事に大事に守らねばならないものである。

カンボジアから奇蹟的に救出された内藤泰子さんという元外交館夫人が、「余りにも平和に慣れきっている日本が恐ろしいようです。電車に乗っても、お忘れものがないようにと注意してくれますが、少し過保護すぎるよ

うな気がするのです……」といった言葉が印象的だった。そしてこの三月、同じ全日仏青の依頼によりマレーシア仏教会の日曜学校、幼稚園、小学校を尋ねた。どこも子供達が旗をふって歓迎してくれた。私の拙ないパネルシアターに指導者の仏教青年が感激して、ビデオテレビに収めてくれた。余りにも日本の仏教徒に期待するものの大きいことに、恐ろしさすら感じて帰国した次第である。

◎お願い

諸物価の高騰、及び郵便料金の値上げにより、弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、やむをえず値上げ変更することになりました。

昭和五十六年四月一日より、新年会費三、〇〇〇円とさせていただきます。

幸い、会員諸兄の皆様から早速に暖かいご理解をいただいて、すでに多くの方々からのご支援のまごころを頂戴いたしております。まことにありがたいことであると、心から感謝の意を表したいと思えます。どうぞくれぐれも宜しくお願いします。

法然上人鑽仰会

仏教徒としての生き方・その生活指針

新保義道

(ハワイ・カフルイ浄土院住職)



仏教の話は生活と直結していない。「念仏を称えなさい」といわれるが、念仏を称えるとどうなるのですか。「仏の教えられた道を 歩みなさい」と言われるが、その道というのはどんな道ですか、などと言うことをよく耳にする。

ここで私は、仏教徒として、仏教徒らしく生きていく生き方を考えてみたい。元来私達は「自分で生きていく」と思い、「自分をとり巻くすべてのものは自分の為にある」と考え勝ちで、特に創造神を説く一神教的考え方に立つ人に多い。これは全く人間の思い上った一人よ

がりの解釈というものであろう。

仏教では命あるものも命なきものも総ては相依り相助け合っているもので、一見無関係と思われるようなものでも私が生かされている為には無くてはならぬものだと思取っている。事実私という一人の人間はこの世にある総てのものの恵みを受けて生かされているのである。またそう気付かせて頂くことが仏教である。そこに有難いと合掌する気持が起きて、平安な生活を営むことが出来るのである。従って我々の生活は、「恩を知り恩に報ゆる」生活でなければならぬと思う。

狭義に考えても私というものは社会の一員として、社会の中で生かされているのであるから、私の生活も自分の利益とすることが他人の利益となり、他人の利益となると思われることが自分の利益と繋がっているものである。仏教徒の生き方は本来他先自後と言って他人の利益をはかることが本筋ではあるが、私達の置かれている環境、状態から百歩ゆずって自生他後になっても、少くとも自分の生活が他をも利益することではなければならぬ。従って仏教徒としての生活指針もこの点に立脚している。

仏教徒の生活指針は自分に重点を置くか、他に重点を置くかで二通りに分かれてくる。

一、六つの心構え……自己に重点をおいたもの

1 他に与えることのできる喜びを知ると共に、貪りの心を少しでも少くする

惜しい欲しいが世の中を乱す根源である。自分の持

っている物、知識、力などをできるだけ他の人のお役に立つよう差し出すことによって、段々と欲深の心も少くなり、物を差しあげて本当によかったと喜ぶ気持ちが湧き、親切な心が段々と深まってくる。

2 規律、約束を守る

約束や規律、法律を守ることは一見不自由のように見えるが、これらを守ることによって他人に迷惑をかけるいばかりでなく、真の自由が得られる。皆が交通規則や信号を守るのは不自由だといって守らなかったらどうなるだろうか。交通事故が続出し、如何に立派な車を持っても道を走ることが出来なくなってしまう。約束、規律を守ることによって相手に迷惑をかけずにすみ、お互いが安心し、信頼し合った生活を送ることができる。

3 忍耐し腹を立てない

誰しも自分の思い通りにできない時には腹が立つも

のではあるが、短気は損気といわれているように、腹を立てて結果がよかったということは恐らくあるまい。身を亡ぼす元にもなりかねないのが怒りである。従って少々位自分に利益となることでも、他の人の為にならないことであれば、決して腹を立てたり、喧嘩をしないようにすることが肝心である。

4 不撓不屈の精神で最善を尽す

早い話が勉強と勝負ごととを比べてみると自分の為、世の為につらなる勉強よりも勝負ごとに熱中する人が多いのではなからうか。また悪事をして身を亡ぼす人はあっても、善いことに熱中して身を亡ぼした例は少ない。一流の運動選手になる為には不撓不屈の精神で練習に励まねばならない。自分の為になり、世の中の為になることに対しては、始めから終りまで一生懸命にやり通すという心構えがほしい。そこには自ら健全な力、技倆、精神が備わってくるものである。

5 如何なる場に処しても心が動揺しないよう、常に心を落ちつける工夫をする

心が落ちつかずに立派な仕事が出来るはずが無い。例えば下手な碁打ちの勝負は二、三十分でつくが、上手な碁打ちになる程時間をかけて打つ。長時間に及んだ時あせりの出た人は、仮にその人の腕が上でも必ず負けると言われている。私どもは常に心を落ちつける工夫をすることによって、如何なる難局、困難にぶつかってもそれを乗り切り、切り開いて行くことができるのである正しく物ごとを判断することのできる力（知恵）を養っていく。

科学の尖端を行く原子力の利用も、その使い方如何によつては人を生かす力ともなり、人を殺す力ともなる。私たちはどのようなことをするにしても、これが自分を生かし他をも生かすものであるかを正しく判断して実行にうつらなければ、世を害し、自分を亡ぼすことになりかねない。併しこの正しい判断は決して容易ではないから、常に学び、知恵を身につけるよう努力することが大切である。

二、四つの行い…他に重点をおいたもの

1 奉仕の行い

目に見える物、学問、知識、真心まごころなど目に見えないものを、自分以外の人、世の中に役立てるよう惜し気もなく差し出し、親心、誠意をもって人に接すること、自分の出来る限り寄附や奉仕活動をする。

2 やさしい言葉

言葉は魔物とも言魂ことたまとも言われている。一つの言葉で相手を傷つけ悲しませもすれば相手を喜ばせ生きかえらせもする。常に私たちは荒い言葉、悪い言葉、きつい言葉を使わずに、やさしい言葉、よい言葉を使い親切に話すように心がけたい。そうなるには自分が優しい親切な人にならねば「巧言令色鮮の仁」で、やさしい言葉は「おじょうず」や「おべっか」であってはならない。

3 他を活かし益する行い

私達はみんなのおかげさまで生かされている。自分もまた、自分のすることなすことが少しでも人う為、世の為にお役に立つよう努力していくことが大切である。一つの商売にしても儲け一点張りの経営よりも、買う身になって売る店の方が却って儲かっているのが実状のようである。また例えて言うと、重い荷物で困っている人を助けてあげるとか、通り道に石があったら横の方へどけておくとかいうようなこともみなこれである一日一善というようなことは是非実行していきたいことである。

4 相手の身になって行動する

母親が幼い我子に食べものをたべさせる時には、子供が大きい口をあける時食べない母親まで一緒に大きな口をあけている。これは食べさせようという親の気持が子供と一つになっているからである。「共に喜ん

でくれる人がいるとその喜びは倍になり、共に悲しんでくれる人があると悲しみは半減する——私達は常に喜びも悲しみも相手の気持ちになって考え、相手の立場に立って（身になって）助け合い、慰め合い、喜び合うことが肝心である。お客があった時でも自分本位のお接待でなく、お客の気持、体調などに合せておもてなしすることが大切である。

我々仏教徒は以上挙げた「六つの心構え」と「四つの行い」を日々の生活指針とし生きていくことに心がけたい。それらを全部実行しなければならぬというものではなく、その内の一つか二つでも完全に出来ればその他は自然にできてくるものである。たとえ完全に出来なくても少しずつでも実行に移して行くのが仏教徒の生活でなければならぬ。

仏教ではよく網を例にとる。どの結び目一つを引き上げても他の結び目がついて上ってくるように、総てのものが繋り合い結び合っているのがこの世の中である。結び目の一つ一つが私達である。一つや二つの結び目では

網にならないように、すべての人がしっかり手を結び合ったとき始めて立派な世の中になるのである。以上十の内で、自分に一番できそうなものから実行していくようにしよう。例えばやさしい言葉や親切な言葉なら誰にでもできる。その内に自然と相手の身になって考えることもできれば、人の手助けもできるようになってくる。

『新刊』

『幼児用』 教育えほん

『ほうねんさま』

B5判、表紙共一二ページ（カラー刷）

定価三〇〇円（送料実費）

申込先——

〒102 東京都千代田区飯田橋一—十一—六

大道社

◇◇◇「浄土句集」欄への投句のお願い

— 及び俳文等の寄稿のお願い ◇◇◇

『浄土』誌本文中のオアシスともいうべき、「浄土句集」欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生
の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に
富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させ
ていただきます。

さて、この「浄土句集欄」へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願
いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに
衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しくお願いします。

- 一、内 容 俳文、句会便り等の随想
- 一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度
- 一、締 切 毎月五日

法然上人鑽仰会

表紙のことば

「海^{かい}芋^う」

土屋 正男

花道展などでよくみる花である。カラーともいう。濃緑心臟形で葉脈のはっきりした葉に肉の厚い純白の花はよくマッチする。

しかしこの花びらに見えるのは花卉ではなく、花は蕊の穂状のものがそれであって、大きく白い仏焰状のは花をまもる苞なのだそう。水芭蕉によく似ているが少し葉が違うようだ。

お華の世界ではいろんな花たちと併せ活かされるのを見るが、やっぱりこの花は独りで

おいてやりたい感じがする。独立孤高の気とでもいうのだろうか、そんなものを持っている花だ。

以前、真夏のいちめんの碧空をバックに、月山の湿原の中程に水芭蕉が幾つか遠く咲いていたのを眺めたことがあった。いかにも都会の汚濁から離れた清逸で明るい花の姿であったが、小雨の降る中で見たらまた別な趣きがあることだろう。尾瀬の水芭蕉が雨にぬれて咲く頃一度足を運んでみたいと思いつながら

果さぬうち、あまりに有名になりすぎ観光化してしまつて、板橋も狭いばかりにぞろぞろ押し合いへし合いしている写真を見たらもうその気もなくなつた。この多勢の中には携帯ラジオのボリュームをあげてキャツキャツと騒ぎながらの人達がきつと何人か交っているだろうからだ。水芭蕉は湿原の中で静かにそ

つとしておくのがいちばんいい。
海芋も今は温室内で四季栽培して需用に応えているようだが、もとは北海道の湿原地帯に多く自生している花だという。
きたぐに北国の壮大な自然の中で誰にも知られず、ひっそり群生している姿はきつと尼僧のように美しいことだろう。

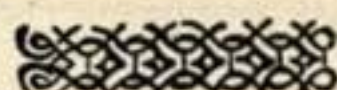
◎『浄土』表紙版画販売についてのご案内

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、土屋正男先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

浄土句集



ざわめきの銀座町角社会鍋

東京 真野 竜

評 師走の銀座の町はごった返している、

その町角に社会鍋が据えられた。道行く人の目はそれにそそがれ次から次にお金が入れられて行く、人の心は善だ。

春の風邪押しことわれぬ御法座に

福岡 国友 星畝

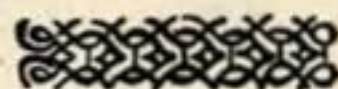
評 風邪は万病の元であるから無理は出来

ないが、断われぬ法座となれば押して行かねばならぬとは残念至極な事だ。

もらい来し子の風邪一家風邪籠

山形 松田 允子

一田牛畝選



評 貰って来た子供の風邪が一家中にひろ

がった。みんな早く癒えるように、熱いものを食べて部屋に湯気を立てて風邪籠をすべきである。

成るように成りて終りぬ年の暮

東京 鈴木 葉子

評 無理押せば何処かに無理が出て来るの

である。成るに任せるより他にないのである。総て新しい年に任せたがよい。

余寒なお思はざる師の計を受けぬ

東京 細田 初江

評 春も近くなつた、凌ぎよくなつたと思つていた矢先、師の計報とは全く思いも寄らない出来事で悲しみに堪えない。

東京 吉田ゆきゑ

春泥やようやく孫の歩き初む

評 孫が歩き初めた。大地を歩かせれば喜ぶ

にちがいないが、春泥とはくやしい。それでも孫は喜々として歩む。

京都 安藤 寛

笑ひつつ雪に転げて起き上る

福岡 安藤平次朗

臘梅の暮れていまなほ匂いくる

福岡 荒牧 還愚

我が坊は山荘めきて梅匂ふ

東京 小笠原香祥

冬木立突き抜けし空昼の月

東京 吉原登起子

合掌は無事にすごせし去年今年

東京 新井 新生

明の春影絵となりて鳥遊ぶ

福岡 稲永 新

柚人の薬家の手入れ山笑う

東京 栗原やえ子

料亭に句座を設けて冬ぬくし

東京 末常てる子

山形 松田 光誉

山口 上野 明達

なにやかや心忙しき師走かな

一行に風邪ひきしこと記しておく

孫に手を引れて寺へ彼岸かな

東京 阪入志津枝

三重 山田 うた

三重 森 静枝

独り居に慣れて今年の雑煮かな

里を過ぐ樹氷まぶしき旅の窓

男坂登り待りしお身拭い

福岡 高良 慈風

群馬 島津 か寿

山口 三井 寛静

花散るや戦災地藏子を抱ける

春炬燵孫のもの縫ふ老眼鏡

豆腐切る明るき霜の厨窓

福岡 権藤みきを

東京 猪瀬 幸子

長崎 木津 青邨

急ぎ旅鉄路の雪に阻まれて

木の実独楽遠き記憶の中に澄む

草の芽の早も出揃ふ雨うれし

福岡 上滝津弥音

東京 田中 秀代

大分 丹羽 難中

春時雨傘借り出づる美容院

木の洩れ日に蕾の光る辛夷かな

祖師の勞身に受け雪の法然忌

福岡 高良 幸代

東京 栗原とも子

福岡 前田 秀峰

古処おろし色まだなさず犬ふぐり

釣銭と一緒にくれし薺かな

初明り弥陀に阿吽の竜柱

福岡 服部 光代

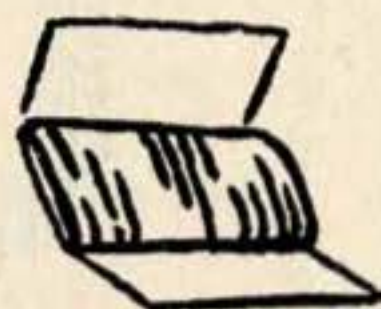
東京 真野よし子

一田 牛畝

餅を搗く孫の足元定まらず

鯉料理長寿祝いの新年会

寺々を抱き若葉の東山



自由の反省

—和と求心力—

まつざき か じょう
松崎可定

(長野県飯島町聖徳寺住職)

今のわが国で、一番多く目につく字の中に「和」という字があります。家庭・室内の色紙や状差し、飾り皿や煙草盆等に多く用いられており、現総理の鈴木善好さんも和の政治を提唱しておられます。

和といえは仏教の教団のことを、僧、和合衆といい、また和尚とも呼んでいる関係で、私たちに最も親しい字であります。また聖徳太子は、和国の教主（わが国の積尊）と呼ばれており、また日本のことを大和国ともいいます。

聖徳太子は、当時の蘇我物部等の閥族が、皇室を挟んで互いに争っていたのに対し、正しい政治理念を示し、国を治めるために、十七条憲法を制定してその第一条の冒頭に、「和を以て貴しとなし、さからうこと無きを宗とせよ」と述べておられます。私の住職寺の名は太子院聖徳寺といって、太子に縁がある関係で、和ということには大いに力をいれて、機会ある度にその必要を説いて来ていますが、それより先きに一般が、和を取り上げて来ていることに意味がある様です。

この様に「和」が、戦後広く注目されて来たのには、因って来たる理由がある筈で、私はそこに、日本人の偉大な生活の智慧、敏感な直感が働いている様に思います。即ちそれは、戦後のいわゆる民主主義に対する、莫然たる疑い、あるいは、その欠陥に対する無意識的な防衛心が「和」を取り上げて来ている様に覚えます。

民主主義は、いうまでもなく、自由と平等、基本的人権等が根幹であって、人類の発展は、これらを得るための永い闘いの歴史であったとも見られる位で、各国とも、封建的権力との流血の争いを経て、漸くにして手にし得たものであります。わが国でも、明治期の自由民権運動や、戦時中の思想言論等の抑圧を通じて、戦後漸く憲法によって保障されるに至ったその結果が、わが国現在の経済発展や、文化、国民生活の向上ともなったも

ので、いわば、民主主義は、得難くして漸く得た、貴重な宝でありましょう。

しかし、どんな貴い宝物でも、世の中はそれだけあれば良いという様なものではありません。殊に今の民主主義（アメリカ式と私は呼びたい）には、大変な欠陥があるのであって、そこに経済発展と背中合せの様に、不正汚職強盗殺人等の社会不安や、学校や家庭における荒廃や暴力がエスカレートする理由があるのです。

では何が足りないか、その欠を補うものは何か。それが「和」であり、道徳や宗教でなくしてはならないのです。

そこで先ず自由について考えてみたい。自由はその宿命的性格として、「君はそう思うか知らんが、自分はこう思う」「君はそちらへ行っても、自分はこちらへ行く」といった風に、物の考え方も行動も、また価値観においても、個々別々になり易く、従って人間関係も分裂対立的になり、しかもその間隔が広

くなつて行く傾向があります。いわば自由は、人間関係をバラバラにし、遠くする性質がある。つまりこれは、放射線状に働らく遠心力です。だから自然に他を排しても自分を生かそうとすることになり、各人の自由と自由は、交通ルールのない自動車運転と同じで、これでは衝突事故は免れません。そこに「さからうことなき」の反対に、争いや孤独の潤いのない世界や、地獄餓鬼畜生界の出現となるのです。

そこで「和」が必要となつて来ます。和は、やわらぎであり、複数者の和合協力平和であつて、自由とは反対に、内へ向い合つて話し合い、手を執り合つて行くことです。ここに各人が段々近くなり、仲良く融和する温かい世界、安らぎの浄土天国も実現する筈です。つまり和は、人間関係の求心力であるとうべきであります。

遠心力とか求心力は、本来物理学上の言葉であつて、全て地球上の物が安定しているの

は、地球がものすごい速さで廻る遠心力と、地球の中心に引張る求心力（重力）の釣合がとれているからです。その様に、人間関係においても、自由という遠心力に対しては、和という求心力が必要です。日本人はこのことを無意識的ながら感得している様に思われます。

太平洋戦争時代には、滅私奉公ということがいわれ、自分の生命も財産も全ては国のものであり、自らは仮りに預っているにすぎないという、極端な全体主義であり、従つて思想や言論まで自由がなかった。それが戦後には基本的人権が保障され、自由が広く認められ、そこから個々バラバラになった人間が、「個人の尊厳」（教育基本法）という、美辞により飾り立てられた。従つて、遠慮会釈もなく自分さえ良ければとか、法律に触れなければ、といった悪しき個人主義的人間が多くな

り、今日は、滅公奉私（日高六郎著―戦後思想を考える）的人間時代になったかと思われま
す。これは、戦争中の全体主義の反動ともい
うべきで反対のものです。滅私奉公が誤りな
ら、滅公奉私もまた誤りで、その間には百八
十度の空間があり、従って他の生き方が可能
な筈です。

人間は社会的動物であって、唯一人の個人
では生きられないし、文化生活はできません
一人の私には、必ず私でない他の人、しかも
大勢の人がいるわけで、この社会の多人数が
一緒に暮すには、そこにルール、つまり法律
や道徳が必要になって来る訳です。ロビンソ
ンクルーソーの様に、島上の一人暮らしなら
ば、全く自由でルールも不用ですが、お他人
様が大勢生活するところには、必ず無くてな
らないのが先ず道徳です。つまり、個人や、
自由からは道徳は出て来ません。自分の外
に、他の多くの人が居るといふ自覚があっ
て、始めて倫理道徳が芽生えて来るのです。

すると、現在のわが国の様に、自由を最高
道徳の様に見ているところに誤りがあるので
す。自由は本来、不当な権力や圧迫に対して
自分を守るものであって、弱い隣人に対する
ものではありません。この辺が狂って来る
と、自分の慾望のために、強盗殺人等他人の
自由や権利を冒すことになる。自分のあるこ
とを知って他人のあることを忘れた自由は、
結局は自分を不自由にするものなのです。

何かで見た英国の格言に、「民主主義と
は、自分も彼と同じ権利があるということ
ではなく、彼も自分と同じ権利を持っている
ということだ」というのがあるが、これは実
名言で、わが国今日の民主主義を正す上で、
極めて適切な言葉です。平面的に見れば、自
分も彼と同じ権利を持っていて、互に平等だ
ということであるが、実際の生き方からすれ
ば大変な違いがでて来る。前者は、他を押し

除けても自分さえ良ければという生き方となり、後者は、他と一緒に幸福になりましょうという生き方となる。更にいえば、前者は政治的功利的人間、後者は、道徳的人間ということになる。「法律は道徳の最少限」という言葉もあるが、法律の基盤には広い道徳の世界があることを知らない、「免れて恥なし」ということになりましょう。

自己中心的な、自分だけのことなら、虫けらや動物でも立派に生きています。しかし、動物と異って人間としての尊さは、自分以外の人々や、社会のお役に立つ様にと生きることとでなければなりません。これが即ち道徳であって、人間の生き方の基本であります。然るに、この本来の人間像がぼやけているところに、現代日本の不幸があるのです。従ってこれは、直接には教育の問題であって、現在の学力本位、選別主義の教育を改め、人間の尊さは、温かい心を持ち、倫理的な生き方をするとともにある事を第一義とする教育であ

るべきであります。しかしこれは、人間の価値観を変える大問題であり、正にこれこそ宗教の関わるべき分野であり、仏教の為に残された重大な働き場所であると考えます。

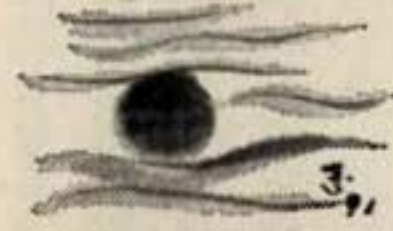
そこで仏教の今日に役立つ大事な考え方をまとめて見れば、

一、民主主義には道徳、人道主義がなくてはならない。

二、右でなければ左、左でなければ右といった、あれかこれかの二者択一ではいけない。

三、相対する反対なものを、付かず離れず包み生かす、分析と統一の要。

これが中道であり和の本義だと思っています。



念佛ひじり三國志

(八十四)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

その午後、明遍は光堂に使者を得て、白河岡崎の新御所に近い高倉邸へ出かけている。建永二年の正月十六日、藤原定家がその日記で「月蝕」と指定した日であった。月蝕にもかかわらず、その宵宮中では節会がおこなわれた。

高倉邸で明遍を待ちうけていたのは中老の女性であった。すでに五十路の大坂を越え、女の残色も乏しかった。

た。

若き日も取り立てて言うほどの美形ではなかった。瘦身小軀、こまめに動きまわることだけが特性だった、と伝えられている。

乙女ざかりの大半を幼帝後鳥羽の乳母としてすごした。そのあと大納言宗頼に嫁したが、ほどなく夫を喪っている。後鳥羽院の熊野参詣に供奉した途次、火傷をおいそれが原因で夭折したものである。

卿二位兼子——正確にはこの時点まだ正三位だった。乳母から未亡人、日かげだけを寂しくたどった女の道に

突如としてまばゆい光りがさしこんだ。五十歳の声を間近に聞こうとして右大臣頼実の正妻となったのである。

それも兼子自身が求めた座ではなかった。右大臣の方が連れ添った妻を捨てて懇望してきたものだった。

もちろん色恋の沙汰ではない。

当時の宮廷では一代のオポチュニスト久我通親が独走していた。平氏と婚を結んで政界の一角を確保した通親は、平氏の没落を直感するやたちまちその妻（——清盛の姪）を捨てた。そして同じ平家と共に西国へ走った能因の妻と結ばれた。

この妻が高倉範子。卿二位兼子の姉にあたる。通親は一方で後白河法皇の愛人丹後局（高階栄子）と手を結んで院政の内奥へもぐりこみ、同時に新しき妻の連れ子（在子）を後鳥羽新帝の正妃へ送りこむべく画策した。これがみのって承明門院となる。

元来、高倉家は藤原南家の流れを汲むが地味な家柄だった。学問に専心するのを伝統とした。文章博士や大学頭を輩出している。官位も正三位止まりで、政治とは縁が薄かった。

ところが範子が久我通親の妻となるや俄然、家門はき

らめきだした。範子の娘は承明門院となり、また従妹にあたる重子は修明門院となって入内した。

通親の辣腕は高階栄子を通じて後白河院をあやつり、鎌倉の源家頼朝にも接触を密にした。武器はお得意の婚姻政策だ。頼朝の娘大姫を後鳥羽院中宮へ、と精力的に動きまわる。

だが、これは通親の「勇み足」とみなければなるまい。頼朝やその妻北条政子の心を掴み、さらには最大の政敵九条兼実を鎌倉から離間させることには成功したが、かんじんのお膝元、高倉一門の強い反感を買ってしまった。

大姫入内はその急死によって頓座、また頼朝自身も娘のあとを追うようにして死んだ。後白河院も崩御、九条兼実は関白職から追放した。

通親独走を自他共に信じていた矢先だった。

正治二年（一一〇〇）の正月、即位した土御門帝の御名を選ぶ段になって、高倉範光（範子の弟）が公然と自己を主張したのである。

土御門は承明門院が生んだ帝だ。血こそつながっていないが通親の孫にあたる。いわんや公的にも通親は「内

大臣東宮伝」という立場だ。それを四位の弁官にすぎない高倉範光が、名付け親は高倉家で、と言い張るとは何事であらうか。

高倉家の内外を見渡したら、ふと妻の妹兼子に眼がとまった。これまでの「灰かぶり娘」が俄かに春をむかえて右大臣頼実の妻となっている。そう言えば近ごろ頼実の動きにも端倪すべからざるものがある、と気づいた。

しかも後鳥羽院はこの結着で、高倉家側に軍配をあげた。絶頂をきわめた久我通親の政治力もその足もとから崩壊が始まったと言えるであらう。

ところでこの「反通親」勢力の結集を、いちがいに高倉家だけに絞って視座を固定させるべきではあるまい。また兼子の辣腕をうんぬんするには時期尚早である。

通親が犯した過誤は、武家への接近である。九条兼実らの世代では平家を通じて武家の実力をまざまざと見てきた。だから公武合体は政治上の不可欠な要素だった。

だが源平の争乱もおさまって泰平がうち続くと、殿上貴族の感覚は再び保元ノ乱以前に舞い戻っている。東国の武士なぞ蕃地のならず者ぐらいにしか考えようとしな

い。

そんな武士の娘を一天万乗の妃として入内させるとは何ごとか。禁断の花園を泥靴で踏みにじる気か。

貴族社会の根底をゆさぶる暴走として、公卿たちは結束、態度を硬化させた。藤原定家が「明月記」で坊門家の娘が鎌倉將軍実朝へ嫁入る行列を見送って「泣キテ沙塞ヲ尋ネ、家郷を出ズルカ」という文章を書いている一事からも察知し得るであらう。

この反武家体質が、貴族たちと後鳥羽院との間で年と共に相乗効果を高めていったことは言うまでもない。

学問の家系だった高倉一門の範光（修明門院の弟）が後年の承久ノ変で首謀者の一人として処刑されている。

失意のうちに久我通親は建仁二年（一二〇二）十月、五十四歳で死ぬ。一夜のうちにこつ然と死んだ。多くの謎が秘められていることは、前にも書いた。

惑星が消えて、しかし後鳥羽院の星雲軌道には早くも新しい星がまたたいている。太政大臣の藤原頼実——というよりもその妻高倉兼子であった。

「明月記」は建仁三年（一二〇三）正月十三日の項で書く。通親が死んで二カ月そこそこしか経っていない。

雨降ル。所勞ニ依リテ、出仕セズ。午ノ時許リニ
聞書到来ス。除目、ヒトエニ勸慮ヨリ出ズト云々。
建久ノ間ニ入道殿下御直言、時儀ニ叶ハズ。時移
ルノ後、去年ニ至リナオ内府、權ヲ執ル。憚リ思
シメスノ間、除目ノ面ナオ尋常。今ニ於テハ權門
ノ女房ヒトエニ以テ申シ行フ。殿下ノ御力及バザ
ルカ

入道殿下とは九条兼実、内府は久我通親のことであ
る。後鳥羽院の宮廷人事(除目)は通親生前の折には彼の
言いなりで、死後は權門の女房に支配されている。兼実
は全く無力であるか。

權門の女房——卿二位兼子であることは明白だった。
兼子の権力はその建仁三年以来、日をおって肥大化し
た。先ごろは後鳥羽院のために白河岡崎に豪邸を新築し
て献じた。彼女ら夫婦もすぐその隣地に住んだ。貴族た
ちは先を争って岡崎詣でだ。それも兼子に会うため、い
や賄路の品を手交するためであった。

慈円は「愚管鈔」でこの時期の政治を「女人ノ入眼」
と諷している。時代の目玉は兼子という女の手で入れら

れている、そんな意味だろう。

「僧都さまに来て頂いたのは、いろいろとお教え願いた
いことがございます」

兼子は丁重な物腰で切りだした。澄ましているときは
何の変哲もないが、ひとたび口をひらくとこぼれるよう
な愛嬌のある顔だった。

話好き、話上手……つまり話すことに彼女自身たまら
ない興味をおぼえるのだろう。それがそのまま聞き手に
つたわってきて、マスクに魅力を感じる。

兼子の最大の武器にちがいない。

「幼いころから和漢の学を修められた貴女です。今更何
をお教えるのですか」

「いいえ、仏法にはとんと暗いのでございます。ひじり
についてお訊きしたいのですが」

「ひじり……」

「いま巷にあふれている念仏ひじりたちです」

「専修念仏者たち？」

「はい。法然お上人の門下と言われる人々ですが、やは
りあの人々は焚身(ふんしん)剝臂(はくや)や捨身行をやる
のでしょうか」

＜焚身捨身＞



「焚身捨身をねえ……」

明遍は答えを返す前にじっと卿二位兼子の眼を覗きこんだ。いったいどんな意図でこの質問を投げかけてきたのであろうか。

二

ひじりの起源は遠く奈良朝にさかのぼる。行基（六六八―七四九）は諸国を遊行し、仏法をひろめ、治政が庶民末端にまで及ばぬ不備を補った。その弟子たちは焚身剝臂、捨身の荒行を断行した。

焚身とは自ら火を放って焼身自絶をすることだ。剝臂は肌を剝ぐ行為であり、捨身は入水自殺である。

宮廷はこれらの「自絶行」を禁じたが、信仰の純粹性を主張する彼らには通じなかった。行基自身も「朋党ヲ構エルコトヲ禁」じた僧尼令にそむいた理由で処罰されている。

ひじりの伝統は空也（九〇四―九七三）や行円（九八五―一〇四七）によって継承された。また、その母によって「名利に走った学生になるよりも多武峯の増賀聖のよう

な道心者になれ」とすすめられて横川に隠棲した「往生要集」の著者源信（九四一―一〇一七）も、増賀や書写山の性空らとともに、ひじりと呼んでよいのであろう。

空也は京の陋巷を歩きまわって大衆に念仏を唱導した。「市ひじり」とあがめられた。行円は鹿皮を法衣替りにかぶって行動した。殺生禁断、絹物すら禁じた僧門の規制を破り、こともあろうに獣皮を着したあたり、行円のひじりとしての主張があった。賤業たる獵師もどきの姿で仏法を説いた。行円は「皮ひじり」と呼ばれた。

これら指導者の立場にあるひじりが信仰生活の純潔さを強調すれば、当然これを極限の地点で受けとめる過激信者が輩出してくる。罪や穢がれをあがなうために自絶行動へ走る。わが身を焼き、皮膚を剝がして血みどろになってのたちまわり、また入水するのである。

「あれは鹿力谷の騒ぎのあった前の年でしたねえ」

と兼子は、明遍が黙りこんだままなので、自ら話をつなごうとする。

「治承の前年なら安元ですね」

「夏のことでした。桂川に沢山のお上人が入水なさった」

「八月十五日です。ひじり十一人がそろって捨身しました」

明遍は正確に記憶していた。その安元二年八月十五日、蓮華淨聖人という「町ひじり」が先達になって総勢十一人が桂川へ投身自殺をしたのだった。

この安元二年は、法然が比叡山を下った承安五年の翌年にあたる。（浄土宗ではこの承安五年を開宗の年としている。）その直後に都で十一人ものひじり上人が集団自殺だ。法然が下山したころのきびしい時代相が想像できるであろう。

「あの年は嫌なことばかりでした。六月に高松院さま、翌月には建春門院さま、六条の新院さまがあいついでお亡くなりになりました」

高松院は故二条帝の正妃であり、建春門院は後白河の女御で晩年は皇后となった平滋子である。新院は六条上皇のことだ。この方は崩御の折未だ十三歳だったが、すでに二条帝をついで帝位につき、それを退いて上皇になったものである。

「悪疫がひろがったのじゃ。わしも危うくやられるところだったが、新領地の白川へ検地にいったおかげで鄙

（ひな）の水を飲んで助かったわ」

いつのまに入室していたのだろう。あるいは明遍が着座したそもそものときからそこに座っていたのかもしれない。大相国の頼実が話題に加わりながら屏風から細長い鶴のような姿をあらわした。

頼実、言わずと知れた兼子晩年の夫である。いや兩人ともこの「怪奇な」婚姻によって宮廷内での風雲に乗じたのである。

頼実は阿波大臣経宗の長男だった。大炊殿とも呼ばれた経宗になぜ「阿波大臣」の異称がつけられたのか。彼は平治ノ乱で源義朝、藤原信頼に加担したのである。乱に破れて逮捕され、いったんは死罪を宣せられた。しかし関白忠通（九条兼実の父）などの取りなしで死一等を減ぜられ阿波国へ流された。もちろん官位剝奪である。

「阿波大臣」の由来となった。

だが流刑期間はわずかに二年、応保二年に都へ戻ると翌年にはもう復官。ほどなく左大臣の椅子に坐った。以後は九条兼実の対抗馬として地味ながら禁裡での勢力を保持し続けた。

息子の頼実、暗愚ではないがひ弱い性格だったらし

い。政治上の識見も気骨もない。兼子との結婚も後鳥羽院の構想を無抵抗に受容したふしがある。院としては頼実の家門地位と兼子の才智とを合体させて自家薬籠中の政治を続行したかったのであろう。ねらいはあくまでも貴族群の掌握だ。九条家の抬頭を阻止しなければならなかった。頼実と慈円和尚を押さえておけば万全なわけである。

頼実の人柄は、この時点、次のような言葉が端的に物語っているであろう。

「つまりあの十一人のひじりたちの捨身は、禁裡に取り憑いた呪いをふり払うためだったのじゃよ」

安元二年の「町ひじり」入水を、自分らに都合のいいように受けとめている。

何で十一人もの求道者たちがわが生涯を死に替えて宮廷や貴族たちの安穩を祈ったりするであろうか。

平家一門の専政。宮廷も宗教界もあげてこの武家権力におもねっている。民は飢餓と災害で苦しみどおした。ひじりたちは強い抗議の姿勢で、世直しを夢見て捨身入水したにちがいないのである。

ちなみにこの前後、洛中の民衆は承安とか安元などと

いう官製の年号を口にしなかった。「弥勒何年」と呼んだ。

弥勒菩薩が復活して、この間違った世を改めてくれる、と待望したのである。この後にもしばしば日本に現れる「弥勒私年号」だが、記録によれば承安元年を以てその最初としている。

さすがに才女兼子はそんな身勝手な理解の仕方はしなかった。

「明遍さま、法然お上人に率いられたひじりたちは、やはり焚身や捨身をするのでしょうか」

「さあ……それはどんな場合に？」

「例えば師のお上人の身に變事でもあったときに」

卿二位兼子は、というよりも権力を握る後鳥羽院中枢の智慧ある人々は、念仏ひじりを断圧することによって生ずる「反動」を気づかっていたようである。

京洛の各所で、念仏ひじりたちが大挙して時の権力を呪い、暴政をなじって焼身入水自殺を断行されたら、たちまち大混乱におちいるであろう。後鳥羽院への信頼は一気に崩れ去る。

今日、明遍を招いた意図がようやく領解できた。

「法然という人は、おだやかな人となりと聞いています。それと、学殖も深い沙弥です。当然、かつての『町ひじり』のような過激者は作らないでしょう」

「ほんとうですか」

「それと、法然義の教義から申しても焼身入水などあり得ないことです。彼は善導義を念仏の軸点としているからです」

「どこへ届け出るのですか」

「大相国のもとへですが、此方へ使者にでもお持たせ頂ければ結構でございます」

てきばきと指示を与える卿二位だった。

明遍の背筋を冷めたいものが流れた。

機はすでにそこまで熟していたのか。

法然にきびしい処置が加えられても彼の門弟や信者たちは暴発しないだろうか。確たるその見通しを求めるということは、法然への断罪が確定していることを意味する。

宗教者——それも阿弥陀仏の再来かと評価された仏者に「法の筈」を浴せようとする。筈の内容はうかがい得べくもないが、同じ真摯な仏者として明遍は戦慄をおぼ

えずにはおれなかった。

三

男はだしの辣腕政略家兼子の本領は、これより十年ほどを経た建保六年（一二二八）に渾身の賭けを試みる。

賭けの構想は壮大で、かつ辛辣であった。年をかさねるごとに対立感情を深くしてきた後鳥羽院政と鎌倉北条執権との溝を一気に埋めつくそうと考える。いや、埋めるのではない。この溝の埋め土を利用して彼女自身が大飛躍しようと夢見たのである。

兼子はあらゆる手段を弄して、凡庸な公卿ばらが思いつかぬような布石を開始した。目的は鎌倉におけるかげの実力者、尼將軍北条政子の上洛だった。

布石はまず鎌倉將軍実朝の官位を急速に昇進させることだ。殿上人でさえ「除目」が近づけば卿二位詣でをくり返す現状だった。兼子にとっては易々たることだったはずだ。

実朝は建保四年六月には中納言に、八月左近衛中将に、九月権大納言へと昇進してゆく。

京都方の底意を疑ぐった北条義時は、大江広元を將軍と会わせ「昇官拒否」を諫言させたが「飽クマデ官職ヲ帶シ、家名ヲ拳ゲント欲ス」〔吾妻鏡〕とこれをしりぞける。

実朝は元來が風流典雅の人、かつ仏法に深く帰依して政治にもうとかった。彼自身の意志はそれほど昇官を欲しなかつたであらう。この甘い餌で感動したのは、ほかならぬ北条政子だったようだ。

兼子の根まわしは、まんまと結実してゆく。

政子が上洛した建保六年には、実朝の昇官はトッブスビードに乗った。

二月、左大將。三月左馬寮御監。十月内大臣。そして十二月には遂に右大臣の金的まで射止めてしまふのである。

政子は、夫頼朝に帯同した建久以来の上洛を断行した。そのまま熊野参詣へ向った。

政子が上洛してから、卿二位兼子は片時もその身边から離れなかつた。最大級の接待に氣をくばるなかで彼女は政子との「女の友情」を深めようと腐心する。

東西の女傑が五十日余りも生活を共にしたのである。

そこで何が語られ、どんな密約が交わされたことか。

表面上は政子に従二位（従三位とも……）が贈られただけだ。

「吾妻鏡」は書いている。

——出家人ノ叙位ノ事、道鏡ノホカ是ナシ。女、叙位ハ准后ニ於テハ是ノ例アリ。イワユル安德天皇ノ御外祖母ナリ。（二位の尼）マタ知足院殿（藤原忠実）ノ御母儀ノ准后ノ事ハ、タマタマ出家以後ナリ。ヨツテカノ准抛ヲ以テ是ヲ叙セラルト云々

得意満面の記述である。

だが、そんな叙位よりも破天荒に重大な密約が、ふたりの女性の間で結ばれたらしい。それは將軍実朝に男児が出生しない場合（現実には男児出生はもはや絶望的——）後鳥羽院の皇子を鎌倉へ養子として迎え、次期の將軍とする、という密約であった。

密約の事実を、慈円は「愚管抄」のなかで暴露している。將軍実朝が鶴岡八幡宮で横死した直後だ。「カカリケル程ニ尼ノ二位（北条政子）使者ヲ参ラス。行光トテ年

来政所ノ事沙汰サセテイミジキ者トテ使イケル。成功参ラセテ信濃守ニナリタル者ナリケリ。二品(政子)ノ熊野詣デニモ供奉シテ上リタリケル者ヲ参ラセテ、院ノ宮ノ中ニサモ候イヌベカラシメ御下向候ウテ、ソレヲ將軍ニナシ参ラセテ……」と承久元年の模様を紹介したあと、

——コノ事ハ熊野詣デノ料ニ上リタリケルニ、実朝

ガアリシ時、子モ儲ケヌニサヨウアルベキナド、

卿二位物語シタリト聞コエシ名残ニヤ

と素っ破ぬくのである。

実朝横死の直後に政子は使者行光を京に派し、後鳥羽院の宮(皇子)の誰かを鎌倉へ下向させて欲しいと申し入れてきた。これは建保六年に政子が熊野詣でのため上洛した折、卿二位兼子と約束していたことなのだ、と慈円は強調する。

天皇と武家將軍が兄弟という緊密な間柄になる。公武合体、天下の平和にとってこれ以上の妙手はないであろう。またこれが実現していれば承久ノ変は発生しなかった、と惜しまれるような大構想——

ところがどっこいこの大構想には兼子なりの野望がひそんでいた。

將軍の後継者として鎌倉へ送りこむ皇子だが、兼子はずっと以前から青写真を作製していたのである。

まず兼子は、かねて坊門大納言信清の娘を養女としてもらい受けてあった。その姉は將軍実朝の御台所として鎌倉へ下っているのだから、深慮遠謀もすさまじいばかりだ。次にこの養女を後鳥羽院の後宮へ送りこんだ。幸いにも彼女は上皇の胤を宿した。長仁、頼仁の二皇子をあいついで生んだ。

兼子は二皇子をその母ともども手もとへ引き取って育てた。兄はいつか必ず天皇に、弟は鎌倉將軍に、卿二位の瘦せた胸は一杯にふくらんだ。

ところで北条政子は、兼子のこの提案をどう受け止めたのか。「愚管抄」の承久元年の記述では完全に密談に乗った気配だが、果たしてどうだろう。苦勞育ちの政子だけに丸ごと信じこんだとも思われない。

「吾妻鏡」は建保六年四月の頃で、熊野詣でを終えて京都へきた北条政子を後鳥羽院と対面させる配慮が政子自身の意志で踏みにじられた事実を報じている。

「辺鄙ノ老尼、龍顔ニ咫尺スルコト、ソノ益ナシ」

としてまっすぐに鎌倉へ帰ってしまふ。せっかく政子を上洛させながら、最終目的だった後鳥羽院との対面は実現できなかった。

また後鳥羽院も將軍実朝の横死直後にやってきた政子の使者に「如何ニ将来、コノ日本国ヲ二ツニ分ケル事ヲバ仕置カンゾ」と拒絶している。

政子の使者もゼスチュアめいていて、彼女は折返し身内の北条時房を京都へ送りこむ。反後鳥羽色の濃厚な九条家から、故良経の孫にあたる頼経を將軍の後継者にもらい受けている。

すでに承久ノ變の前夜であった。年ごとに急迫を告げる政治情勢に、卿二位兼子の認識はやはり甘かったというほかはない。

いや、そこに私利私慾がからんだからこそ分析や展望が甘くなったのであろう。

(つづく)

|| 好評 ||

總本山知恩院
大本山増上寺
大本山善光寺大本願
布教師 小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

— 仏教的視点より現代人への提言 —

○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者小布施師の名調子が、一気呵成な筆致で展開される。

すでに三版を重ねて、好評発売中。

B 6判 二三〇頁 価一五〇〇円

(一五二五〇円)

(申し込み先)

〒381-12 長野市松代町東寺尾三八八一

長明寺

振替(長野) 一四三二二

◎読者の皆様へのお願ひ――

弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、既報の通り、三、〇〇〇円といたしました。その後会員諸兄の暖かいご配慮、ご支援をいただいてまことにありがたく思っております。

さて、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、新たに「読者のコーナー」を設けたいと思います。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙五枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十七巻 五月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十六年 四月二十五日 印刷

昭和五十六年 五月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八―八二一八七番

大 東 出 版 社

浄土宗学侶待望の覆刻

『浄 土 学』 (全八巻)

大 正 大 学 浄 土 学 研 究 会 編

A 5 判上製 各巻平均 600 頁 限定 300 部刊

昭和55年 4 月より隔月刊行

第一巻 定価 12,000 円

—— 予 約 申 込 み 受 付 中 ——

◎大正大学浄土学研究会編『浄土学』（第一～二十九輯）を善導大師一千三百年ご遠忌奉讃の一環として、全八巻にまとめ覆刻再刊致します。『浄土学』は宗教大学時代の研究誌『無礙光』を継承し、昭和五年三月に創刊された研究誌で、浄土宗学はもとより、広く浄土教に関する諸論攷を収載しています。今回の再刊に際し、各巻末に執筆者の紹介を、第八巻には新たに「浄土学関係雑誌論文目録」を付し、研究者の便益を計りました。

このたびの再刊が『浄土学』全巻を入手し得る最後の機会となります。お早目にご予約申込み下さい。

＜ 詳細内容案内謹呈 ＞

〒 113 東京都文京区白山 1-37-10

TEL 03 (816) 7 6 0 7

振 替 (東京) 3-5 7 2 0 7